

## 『ボズの素描集』

(その五)

C. ディケンズ 作

藤本隆康 訳

— 情 景 —

## 第十一章

## アストリー座\*

書物や店の陳列窓や壁の貼紙に、大きな麗麗しい黒いアルファベットの  
大文字を見つけると、アルファベットの神秘の世界への手ほどきを初めて受  
けたときの、ぼんやりとして混沌とした記憶がすぐに甦ってくる。文字の先  
端がきっちりとなぞられているような気がしてきて、それが文字の形をより  
強烈に印象づけ、想像力が掻き乱されるのである。そして、たいていの子供  
が経験する知識の混乱を正すために、一週九ペンスあるいは四半期に十シリ  
ング六ペンスの授業料で、頭を小突いて最初の教育理念を叩き込んでくれた  
立派な老婦人のあの固いこぶしを思い出して、思わず身をすくめたりする。  
こうした感情を呼び起こす例は他にいくらかもあるが、その最たる場所は、  
アストリー座である。当時は今の「ロイヤル曲馬劇場」ではなかったし、デ

---

\* フィリップ・アストリー（1742-1814）の創始した曲馬座。始めは野天に円形のテン  
ト小屋を作り、そこで曲馬や綱渡りや曲芸などを見せていたが、1779年ウェストミン  
スター・ブリッジ通りに木造の円形劇場ができ、今日のサーカス小屋の元祖となる。  
三度火災に会い、その都度復興されるが、1895年にその幕を閉じる。

ユクロウ（アンドルー・デュクロウ，1793-1842。曲馬師で道化役者。1880年，彼はアストリー座の曲馬と綱渡りの花形となり，後にバントマイム役者として名をなし，劇場の）が花々しく登場して，サーカスのおかくずの床が古典趣味の照明と移動ガス灯の光で照らされるということもなかった。しかしこの劇場の特色は何もかも昔と変わらない。出し物も道化役者のおどけも昔のままだし，曲馬師の技の素晴しさも喜劇役者の頓知も相変わらずで，悲劇役者のしゃがれ声，「高度に調教された軍馬」の勇ましさも昔の通りである。アストリー座は良い方に変化している——われわれ人間の方が悪くなってしまったのだ。芝居に対する愛好心は今では失せてしまい，言うも恥ずかしいことだが，昔あれほど楽しんだ華やかな出し物よりも，今では観客の方を見る方がずっと楽しくて面白いのである。

われわれの楽しみは，復活祭とか洗礼者ヨハネの祝日（六月二十四日で四季の支払い日の一つ）にきまって見られる芝居見物の一行を眺めることである——パパにママ，そして背丈は五フィート六インチから二フィート十一インチまで，年令は十四歳から四歳まで取り取りの十人の子供たち。先日の夜，われわれが劇場の中央の仕切りに席の一つに腰を下ろしたとき，すぐ隣の席を占めたのは，アストリー座の見物客の理想美を描くとすればさもありなんと思われるような一行であった。

はじめに男の子三人と女の子一人がやって来る。その子供たちは，仕切り席の出入口から大声で発せられたパパの言いつけに従って，前の席に陣取る。それから，さらに二人の女の子が，明らかに家庭教師と思われる若い婦人に連れられて入って来る。さらに三人の男の子が入って来るが，この子供たちも最初の男の子たちと同じように，シャツの襟にしっかりと糊をきかせ，青色の上衣とズボンを着けている。それから，編み上げのフロックを着せられて，大きなまん丸い目を皿のようにして興奮の極みにある幼児が，座席の上を運ばれる——運び込まれる際に，その子の小さな桃色の脚がほとんど丸見えになる——それからママとパパ，そして十四歳の長男が入って来るが，その子は明らかに自分が家族の一員でないふりをしようとする。

女の子たちの肩掛けを取り外してやったり，髪を飾る蝶形リボンを直して

やるのにまず五分かかる。それから一人の男の子の席が柱の後ろ側になって前を見ることができないことがはからずも発見され、家庭教師が柱の後ろに身を移し、男の子は抱えられて彼女の席に移される。それからパパが男の子たちを厳しく叱って、ハンカチをちゃんとポケットに入れるように命じ、ママは、まず女の子たちのフロックをもう少し肩からずらすように家庭教師にうなずいて目配せし、立ち上がって小さな子供たちの一隊を閲兵する——検閲の結果はママのたいに満足するものであったようである。というのも、彼女は座席の向こう端に立っているパパに満足そうに視線を向けたからである。パパもそれに目で応え、やけに力を入れて鼻をかむ。哀れな家庭教師は、柱の後ろから顔を出し、家族全員に対する強い感嘆の気持ちを目に表して、ママの視線をおずおずと捕えようとする。そして、アストリー座がドルーリー・レイン座の二倍以上大きいかどうかという問題を話し合っていた二人の男の子たちが、「ジョージ」に訊いて決めてもらおうと言う。それを聞くと、他でもない例の若紳士の「ジョージ」は腹を立て、公衆の面前でそんな大声で何度も自分の名を呼ぶなんてけしからんことだと、穏やかならざる言葉で文句を言う。すると子供たちはみなどっと笑い、男の子の一人が、「ジョージはすっかり大人ぶってきたぞ」と自分の意見を表明してとどめを刺す。この言葉にパパもママも笑い、ジョージ（礼装用の杖を持ち、ほおひげをはやしかけている）は、「ウィリアムのやつ図に乗って生意気なことばかり言う」とぶつぶつ言って、その晩ずっと軽蔑しきった態度をとり続ける。

芝居が始まり、男の子たちの喜びようきたら際限がない。パパもまた明らかに面白がっている。面白くないといったふりをしようとするが、全然駄目である。ママの方は、花形喜劇役者のおどけた仕種にすっかり魅入られて、大きな帽子につけたいくつもの大きな蝶形リボンをいっせいに揺らして笑う。それを見て家庭教師が柱の後ろからまた顔を出し、ママの視線を捕えることができるとその度に、ハンカチを口に当て、務めとしてお腹をよじって笑う恰好をして見せる。そして立派なよろい装束の男が、必ずや叔女を救出

せん、然らずんば死に果てんと誓約すると、男の子たち、中でも小さな一人の男の子が激しく喝采を送る。この男の子は明らかにこの家族の家に滞在中で、母親をそのまま小さくしたように見える十二歳の小さなあだっぼい女の子と、その晩ずっと子供っぽくいちゃついている。彼女は他の女の子たち（大体から言って、ずっと年長の女性よりもあだっぼい少女たちである）と同じように、騎士の従者が王妃の信任の厚い侍女に接吻したとき、すっかり憤慨したような顔をして見せる。

曲芸場で活劇が始まると、子供たちの喜びは頂点に達する。威厳を保とうとするパパも、劇の進行を見たいという欲望に完全に負けて、仕切り席で立ち上がり誰にも負けないほどの喝采を送る。曲乗りの合間合間に、家庭教師はママの方に身体を屈めて、目にしたばかりの曲芸について子供たちが言う気のきいた言葉を、そのままママの耳に入れてやる。すると、心広いママは家庭教師に酸味入りドロップを与える。家庭教師は、ママに認められたことに満足して再び柱の後ろに引っ込む。家族はみなとても楽しそうに見える。ただ仕切り席の奥に座っている気難し屋の長男は別で、彼は気取って他の子供たちには目も向けず、また自分の方も影が薄くて誰からも目を向けてもらえず、ほおひげがあるべき個所を時おりこすって孤独の栄光にひたっている。

二度、三度とアストリー座に通えば、夜毎にそして季節毎にまったく変わりばえのしない冗談が飽きもせず繰り返されるのを当然聞かされるわけだが、それが楽しめるくせに、少なくとも一部の曲芸——馬芝居のことであるが——が面白くないという人がいたらお目にかかりたいものである。われわれはというと、ガスの炎が噴出する輪が下ろされ、半額割引のお客に平土間の演技場<sup>リング</sup>から移ってもらうために舞台の幕が引き上げられ、オレンジの皮が片付けられ、おがくずが見事な正確さで完全な円になるようにまき直されると、そこにいるいちばん小さな子供と同じようにわくわくした気持ちになるのである。そして、「またもやまかり出ました」という道化の甲高い叫びにつれて湧き上がる笑いに、昔のよしみから実際つり込まれるように笑って

しまうのである。さらに、曲馬師に対する昔ながらの敬意も簡単に消えるものではない。彼は長い鞭を手にして道化に続いて現れ、優雅な威厳を見せて観客にお辞儀する。彼は、茶色の飾りボタンをつけた南京木綿のどてらを着たそんじょそらの曲馬師とは違って、花形の乗り手に付き添うれっきとした生まれの従僕で、常に軍服を着用し、コートの胸のところにテーブルクロスをつっ込んでいる。その姿を見ると翼を串刺しにして焼かれる鳥がどうしても頭に浮かんでくる。彼は——しかし、いくら説明しても適切な概念を伝えることができないのに、無理に説明することもあるまい。この人物のことを知らぬ人はいないのだから。びかびかに磨かれた長靴、嫉妬心から見当違いに固苦しいと考える人がいたあの優雅な態度、黒髪を額の上で分け顔つきに深い瞑想性と詩的な憂愁を添える素晴らしい頭の形、これらは誰の記憶にも残っている。ちょっとからかい気分になって道化の調子に合わせるときの、彼の優しい快い響きをもった声もまたその気高い物腰と見事に調和している。そして彼が、「さあさあ、ウルフォード嬢に登場してもらいましょう」と大声で言うときの威厳に満ちた態度は強く記憶に焼き付いて、けっして忘れられるものではない。また彼がウルフォード嬢を曲馬場に連れ出して紹介するときの優雅な態度、そして彼女に手を貸して鞍の上に乗せ、彼女の乗った優美な馬のあとについて曲馬場を回る姿は、つめかけた女中たちすべての心に深い感銘を与えずにはおかない。

ウルフォード嬢と馬が止まり、楽団が演奏を止めて一息つくと、彼は洗練された態度で道化と次のような問答を始める（道化が口火を切る）——「ねえ！」——「何ですか？」（二人のやり取りは、いつも丁重この上ない）——「私が兵隊だったことを お聞き 及びですか？」——「いいえ」——「兵隊だったんですよ——鍛練にはへこたれませんか」——「へえ！」——「今やってお目にかけましょうか」——「どうぞ。さあ、急いでやりましょう」（長い鞭がひと打ちされる。そして「よししてくれ——いやだよ」と道化。）ここで道化は地面に身を投げ、ひきつけを起こしたように身体をくねらせ、身体を折り重なるほど曲げたかと思うとまた伸ばし、苦痛ここに極まれりといっ

た顔をして見せる。天井桟敷の客はそれを見てどっと喜ぶが、また二度目の鞭が打ち下ろされ、「ウルフォード嬢は何で止まってるんだね」と相手から理由を訊かれて、道化の演技が中断される。彼は相手の問を受けて、「さて、ウルフォードさん、私がいここにいるのは何のため——行くため、取って来るため、持って来るため、持って行くため、あなたのために何かするためですか？」と叫び、天井桟敷をどっと笑わせる。彼女が優しく微笑んで二本の旗が欲しいと告げると、道化はさまざまに顔を歪めて見せたあと、二本の旗を何とか手に入れて彼女に手渡す。もったい振って旗を手渡すと、道化はおどけて言う——「ヒッ、ヒッ、ほうら見て下さい、ウルフォード嬢は私めを知ってござる。私のために微笑みかけて下すった。」また鞭が振り下ろされる。楽団が演奏を始め、馬が動き、ウルフォード嬢が再び優雅な演技を見せて回り、観客は老いも若きもこぞって喜ぶ。次の中断で、また同じ頓知が発揮されるが、さらに楽しい座興が付け加わる。曲馬師が背中を向けるたびに、道化が滑稽なしかめづらをして見せ、最後に、曲馬師の注意をよそに外らしておいて、その頭上を跳び越えて曲馬場を去るのである。

読者諸氏には、昼間、小さな劇場の楽屋口のあたりをうろつく人種に目を留められたことがおありだろうか？ こうした劇場の入口のあたりを通ると、舗道に三、四人の男たちがたむろして話を交わしている。彼らには居酒屋のパラーの酒客に見られる得も言えぬ気取った態度とともに、こうした種族特有のどこか間が悪そうな様子が見受けられる。彼らはいつも自分たちを見せ物と考えているようで、きまってランプを前に置いている。色褪せた茶色のコートとだぶだぶの明るい緑のズボン姿の若者は、格子縞のシャツの袖口をそれが特上の下着ででもあるかのように、自慢げに引っ張り出し、さらに一昨年の夏に買った白い帽子を、昨日買ったばかりだといわんばかりに右目にかかるほど乙にかしげてかぶっている。薄汚れた毛糸編みの手袋、すり切れたコートの胸に突っ込んでいる安っぽい絹のハンカチを御覧になるといい。彼が臨時雇いの俳優であることは、ひと目見ればすぐに分かる。青い外套、清潔な襟、それに白いズボンを三十分ほど着用させてもらうが、すぐに

自分のすり切れた貧弱な服をこっそり身にまとうのである。夜毎に舞台で素晴らしい運命を誇らかに見せびらかしても、一ポンドばかりの週給とはくブーツがないという痛切な思いに苛まれ、田舎にある父の大邸宅を自慢しても、ニュー・カット（ランベス通りの一部をなしていたが、ウォータールー橋建造のため改良され、現在では The Cut と呼ばれている。）にある三階の裏部屋が侘しく思い出され、金持の女相続人に恋心を寄せられる人物として皆から羨しがられちやはやされるといっても、自分の家では妻が妊娠して踊り子をやめさせられてしまったことが頭にこびりついて離れないのである。

この男の隣りに、てかてかと光る黒のスーツを着て、トネリコの杖でブーツのかつてはかかとのついていた個所を物思わしげにたたいている、馬顔の痩せて顔色の悪い男をおそらく御覧になれるだろう。彼は、平凡な父親とか忠節な召使い、副牧師、地主といったまじめな役どころを演じる俳優である。

ところで、父親と言えば、すべての登場人物が孤児として登場する芝居を是非見たいものである。舞台では、父親は必ずといって嫌われ者で、幕の開く前の事情を主人公や女主人公に、いつも長々と説明して聞かせないと気が済まないのである。それは、たいてい、「なあ、おまえ、おまえの尊い母さんが（ここで老いた憎まれ役は声をつまらせる）おまえを私に委ねてから今年で十九年になる。当時おまえは小さな子供だった」等々といった調子で始まる。そうでなければ、三幕もの長時間にわたって、つゆほども疑わずに顔を突き合わせていた相手が、突如として我が子であることを発見するという形になってしまうのである。父親が叫ぶ、「ああ！目の前にいるのは誰なのだ。このプレスレット！あの微笑！この書類！あの目！自分の目が信じられない——きっとそうだ——そうだ——わが子だ！」——「お父さん！」と子供が叫ぶ。そして父子はひしと抱き合い、お互いの肩越しに目を見張る。そして三度湧き起こる観客の拍手喝采。

閑話休題。場末の劇場の楽屋口の外で、話をしたり気取った態度をとったりしている連中が、こうした類いの俳優であると言いかけたところだった。

この連中は、他のどの劇場よりもアストリー座でいちばん多く見かけられる。たいてい馬丁が一人、二人窓台に腰を掛けていたり、市松模様のネッカチーフと黄色く汚れた下着を着た薄汚ないうらぶれた男たちが二、三人あたりをぶらつき、事によったら腋の下に古新聞でぞんざいに包んだ舞台用の靴を抱えている。数年前、われわれは妙な好奇心からぽかんと口をあけてこうした人たちを眺めていたものだが、今これを書いている瞬間にもそのことが思い出されて、笑いが込み上げてくる。夜、照明や音楽や造花に引き立てられて、乳白色のチューニックに青いスカーフをまとい、さけ肉色の脚を見せて、なめらかな毛並みのクリーム色の馬に跨ってわれわれの目の前を軽やかに走り回る軽快で優雅な人物が、昼間に見る顔色のさえないふしだらな様子の人物と同じであるとは、とても信じられなかったのだ。

今だって信じられない気持ちには変わりはない。芸人の中でも二流クラスのものは、これまで少しは見てきたわけで、それほど想像力を働かせなくても、前述の臨時雇いの俳優と「薄汚れた紳士」、また喜劇歌手と酒場の音楽会の座長とが同一人物であり、悲劇の立て役者が酒に溺れ貧苦に喘いでいる人物であることは容易に察せられる。しかしこの連中の他はみな謎の存在であり、演技場以外の場所で、また神や妖精の衣裳以外の姿で見たためしがない。こうした人たちとは範疇を異にするデュークローは別として、アストリー座で馬に乗っていない曲馬師を知っていたり見たりした人がいるだろうか？ さっそうと軍服を身にまとったわれわれに馴染みの人物が、すり切れた服で現れたり、薄っぺらな普段着を着るまでに身を落すようなことがあり得るだろうか？ あり得ない話だ！ そんなことは信じられない——信じようとも思わない。



## 第十二章

### グリニッジ・フェア

公園が「ロンドンの肺」\* であるとしたら、グリニッジ・フェアはいったい何だろう——一時の吹出物、一種のにきびとも考えられる。それは発熱後六カ月は血が冷える三日間の熱病であり、三日が過ぎるとロンドンは何事もなかったように忽然と平平凡凡としたもとの堅実な生活にもどるのである。

子供の頃、われわれは何年もきまったようにグリニッジ・フェアに出かけ、行きや帰りに、ほとんどあらゆる種類の乗り物に乗った。良心のとがめから白状するが、かつて紳士十三人、婦人十四人が乗り、そして子供を無制限に乗せ、さらにビール樽を積んでばね付き大型馬車で繰り込むという愚挙をしでかしたことがある。そして後のことだが、朝四時をとくに過ぎた時間に、貸馬車の屋上席の八番目の席に、自分の名前も住所もはっきり分らないといったていたらくで座っていたことをぼんやりと覚えている。その後われわれも年を取って大人しくなり、浮ついたことはしなくなった。今では、われわれと喜んで付き合ってくれる人たちと、どこかひっそりとした場所で復活祭や他の休日を過すのが何よりも好ましく思われるのである。しかし、グリニッジ・フェアのことやそこに押し掛ける人たちのことが今でも何か忘れられない。ともかく素描に取り掛かることにする。

復活祭の休日、グリニッジに通じる道は、雑踏と騒音が朝中ひっきりなしの状態になる。辻馬車、貸馬車、二輪軽装馬車、石炭運搬車、駅馬車、乗合馬車、四人乗り馬車、一頭引き二輪馬車、ろばの引く二輪馬車——どれも

\* 1808年1月30日、下院で、ハイド・パークの一部を私的な建物に供しようとする計画を潰す動議で、枢密顧問官ウィリアム・ウィンダムが次のように言った、「公園は以前のように健康と保養の源にはなれないでしょう。公園がロンドンの肺であると言ったのはチャタム卿でした。現在の計画を押し進めれば、何よりその肺を損うことになるでしょう。」

これも人をぎゅうぎゅう詰めにして（というのも、馬が何を引けるかではなく、車がどれほどの人を収容するかが問題だからである）、出せるだけスピードを出してがたごとと進んで行く。砂埃がもうもうと巻き上がり、ジンジャビールの栓が一斉に抜かれ、どの居酒屋のバルコニーも煙草を吹かしたり酒を飲む人たちで鈴なりである。民家の半分は簡易食堂に早変わりし、ヴァイオリンは引っ張りだこ、小さな果物屋はどれもこれも金色に塗ったしょうが入りケーキや安っぽい頑具を陳列台に並べている。道銭取り立て人はお手上げ状態である。馬は前進を拒み、車輪が外れる。「幌馬車」<sup>キャラヴァン</sup>に乗った御婦人たちは、馬車が震動するたびに金切り声を上げ、恋心を抱く男たちは彼女たちを元気づけるにはこれしかないと、びっくりするほど身を寄せる。恋人を持つことを許されない雑働きの女中も、その日は休暇をもらい、毎晩ビールを取りに行くとき、会って話をしようとかっそりと通りの角で待っていてくれる忠実な恋人と精一杯楽しい時を過す——丁稚たちは感傷的になり、麦わら帽子製造人たちの顔が和らぐ。誰も彼もが先を急ぎ、みな同じ願いに駆り立てられて、できるだけ早く縁日の場所にあるいは公園に行き着こうとする。

馬車に乗らない人たちは、三三五五路傍をゆっくりとぶらついている。というのも、「一ペニーで三度試せるびっくり箱」で人を呼ぶ恰幅のいい女の誘惑や、小さな丸い板の上に三個の指貫と一個のえんどう豆を置いた男の、さらに気をそそる呼び声についつり込まれてしまうからである。男は当惑顔の野次馬たちを次のような口上で驚かす、「あんたたちが死んでも七年は笑え、楽しくって髪が残らず白くなっちゃうような手品だよ！ 三個の指貫に、豆が一つ——それ一、二、三、それ二、三、一。ごまかしは絶対なし、目を見開いてよく見てごらん。さあ賭けたり、賭けたり！ 小銭、大銭いくら賭けてもいいんだ。公明正大いんちきはなし。やらんと勝てないよ。ほんとのスポーツマンが運を掴むんだ。豆の入った指貫がどれか言えなくなっちゃったってかまやあしない。誰でも半クラウンから一ポンドまで好きな額で賭けられるんだ。」ここで間の抜けた男が、まん中の指貫に豆が入るのを見たとき連れの耳

にささやく——それを聞くとすぐに、そばに立っている乗馬靴の紳士が自分も見たと言い、あいにく財布を家に置き忘れてきたので、自分は賭けることができないと残念がり、こんな絶好の機会をみすみす逃す手はないと、鴨の男を強くけしかける。「策略」が効を奏し、賭けが行なわれ、男はもちろん負ける。指貫の手品師は、お金をポケットにしまい込みながら、「みんな一か八かの勝負だ。今のは私が勝ったが、次はあんたが勝つ。二シリング六ペンスすったってどうってことないさね。小さく負けて大きく勝つ、これが勝負ってものさ」等々と、自信たっぷりに相手を慰める。手品師の雄弁な長口舌は、その豊かな想像力によって思いつく限り手を変え品を変えて、三人、四人と数を増すばかりと口をあけた野次馬に向けて繰り返されるのである。

居酒屋に次いで、昼間人びとが主に集まる場所は公園である。公園での主な楽しみは、若者たちが若い娘を天文台への険しい坂を引っ張り上げ、それから大変な早さで頂上から引きずり下ろすことである。娘たちの巻き毛やボンネットは無茶苦茶に乱れ、下から見上げる人たちはそれを大いなる戒めにする。「接吻遊戯」（一人が輪の中に入り、その人が異性に触れたり、またハンカチを落とす。それをされた人はすぐに中の人を追いかけて、捕えたところで接吻す）や「おばあさんの針の穴くぐり」（一列に手をつなぎ合わせ、別端に二人の間をくぐり抜ける）もまた、誰もが楽しむ遊戯である。恋に悩む若者たちは、水割りジンと恋心のため、やたら愛情深くなり、その対象となる娘たちは大騒ぎで抵抗したり、頭を下げて逃げたり、「まあ、じゃ、やっちゃったのね、ジョージ——ああ、私に代ってあの人をくすぐってやってよ、メアリー——いや私はだめよ！」といった叫び声や、ルークリース（ローマの貞女。シェイクスピアは叙事詩『ルークリース凌辱』（1594）で貞操を）のような叫び声を上げて、接吻を盗まれた喜びを倍加させるのである。片方の腋の下に小さな籠を抱え、一方の手に脚のないワイングラスを持った小柄な老人や老婆が、そこかしこに群れ集まっている人たちに、「ジン一杯いかが？」と差し出す。そして一口飲んでごらんとまわりから説得された娘たちは、いやよと抵抗しながらも嬉しそうな顔をして飲む。そして、案にたがわず咳き込んでしまう。

年老いた恩給生活者が、一ペニーという安い料金で客に望遠鏡をのぞかせ、マスト製作所とかテムズ河やそこに浮かぶ船舶、昔罪人が鎖につながれて首をくくられた場所など興味深い光景を展示品でもあるかのように見せている。望遠鏡をのぞく客たちは、その視野に入る対象について持ち主にあれこれと質問するが、そんなことまで訊かれたらソロモンだって答えに窮することだろう。そして客はしかじかの通りにあるしかじかの家を見つけ出してくれと要求するが、それはホーナー氏（親指でミンスミート入りのパイを食べた若者ではなく、コロシウム（リージェント公園に南東隅にあった有名な娯楽場。トマス・ホーナーが立案し、デスマス・バートンが設計し、1824年建造された。中にはホーナーの依頼により、画家のE. T. パリスがセント・ポール寺院のドームの上から描いた素晴らしいロンドンのパノラマが展示され人気を博した。1875年に取り壊される。）を建てて評判の人物）でも、少々骨が折れたことだろう。芝生のあちこちに、三、四組のカップルがかたまって座っている。そこで赤いマントを着て日焼けした女が「運勢占い」をしたり、未来の夫を予言したりしているが、未来の夫を描いて見せるのに、さほど観察力を働かせる必要はない。本人が目前にいるのだから。占いをしてもらった娘は笑って頬を赤く染め、粉いの白麻ハンカチに顔をうずめてしまう。当の紳士は、すっかり問の抜けた顔をして娘の手をぎゅっと握り、ジプシーの占い師にたつぷりと見料をはずむ。ジプシーはすっかり満足して立ち去り、残されたカップルも心から満足する。そしてその予言は、多くのもっと重大な予言と同じように、やがて成就するのである。

しかし、日が暮れてくる。群集は徐々に散って行き、はぐれた人たちがわずかに残っているだけである。教会の方角が明るいのは、縁日の照明である。そして遠方から聞こえる騒ぎで、人びとがそこにどんどん詰めかけていることが分かる。三十分前には浮かれ騒ぐ人たちの賑やかな声が響き渡っていた場所は、しんと静まりかえっており、その静寂を乱せるものは何一つとしてないといった感じである。美しい老木の木立、そのすそに立つ壮麗な建物（1664年に設立されたグリニッジ病院）で、現在は海軍兵学校になっている）、その向こうに月明りを受けてきらきら輝く優美な川、それぞれがこよなく美しい姿を呈し、最高に引き立って

見える。夕拝の讃美歌を歌う少年たちの歌声が静かに漂ってくる。来る週も来る週も、ロンドンの舗道をうつうつとした気持ちで歩いてきたどんなしがない機械工ですら、足に実に快い感触を伝える芝生の上を歩いて目の前に広がる景色を眺めるとき、幼い頃から祖国をこよなく愛し守ってきた人たちの晩年の避難所としてこのような場所を選んでくれる国に自分も住んでいるのだと考えて、誇らしい気持ちになるのである。

五分歩けば、縁日の場所に着く。これはまた、今までとは全然違った感興をそそる情景である。入口の両側に、しょうが入りケーキや頑具の呼び売り商人が陣取っている。露店は華やかに照明され、いかにも客の心を引きそうな品がふんだんに並べられている。売り子の娘たちは、雇主に対して熱心に良いところを見せようとして客のコートをつかみ、「つまんでみてよ、お客さん」——「ねえ、いいでしょう」——「そんな渋い顔はしないで」等々といったお愛想で誘って半ポンドのしょうが入りビスケットを買わせるのである。縁日の常連の大多数が、さし当たったの糧食に一、二ポンドのしょうが入りケーキを綿のハンカチに包んで持ち歩いている。歩いていると、時おり樅材のテーブルが目に入る。その上には、小さな皿に盛った一ペニー分の塩漬鮭（ういきょうの実も込みである）とかチーズ皿ほどもある大きな殻のついた牡蠣、さらに何か胆汁のように見える緑色の液体の中に浮かんでいる蝸牛類（えぞばい（大きな巻き貝でヨーロッパでは食用にする。）と呼ばれるものだと思うが）の見本が二、三置かれて、客の目にさらされている。葉巻も飛ぶように売れる。もちろん紳士に葉巻は付き物、火を点したろうそくを中央に置いた正真正銘の葉巻箱に入った葉巻が二本で一ペニーである。

あちらかと思えばこちら、追っばり出したかと思うとまた連れ込む、そして行きたい所以外ならどこにでも人を運んで行く、ぎゅうぎゅう詰めの群衆の中に身を置いた様を想像していただきたい。かてて加えて、女たちの金切り声、少年たちの叫び声、がらんがらんと鳴るどらの音、ピストルの撃たれる音、鳴り響くベルの音、がなりたてる拡声器、キーキーと耳障りな音を出す安物の拡声器、それぞれ三つの太鼓を持って同時に違う曲を演奏する十幾

つもの楽団の出す騒音、見世物師の大声、そして時おり聞こえる野獣ショーの獣の咆哮。まさに縁日のお祭りのまっただ中に来たわけだ。

目の前にどでかい小屋掛けがあり、正面に大きな舞台があって、色分けされたランプやつぼに入れた脂肪を燃やしてとても明るく照明されている。これが「リチャード・ソン一座」(1830年代から40年代にかけてイギリス南部の縁日、特にグリニッジとキャンパウェルの二大縁日に活躍した旅回り)の小屋である。ここで、メロドラマ(殺人が三度あり、幽霊が一度出る)、無言劇、滑稽歌、序曲それに付随音楽(劇の中で、また場面の合間に演奏される音楽。)といったものがどれも二十五分の間に舞台上で演じられるのである。

一座の芸人たちは、今かつらやびかびか光る飾りを身に付け、代赭(赤鉄と粘土の混ざった赤土。絵の具や顔料として用いる。)や白粉を塗った堂々たるいでたちで、芝居小屋の外を気取って歩いている。御覧になるがいい、メキシコ酋長の役を演じる紳士が何と野蛮な態度で歩き回っていることか！そして花形悲劇役者は威厳をたたえた実に穏やかな目で下にいる群衆を眺め、道化役とあんな打ち解けて言葉を交わしている！今、だんびらを抜いて果たし合いの真似事をやっている四人の道化は、精神程度の低い行楽客には結構なお相手である。しかし、こちらに見えるのは、思慮深い人たちが相手にする役者たちだ。彼らは古代ローマ風の衣裳を身にまとして実に気高く見える。脚と腕は黄色、長く黒々とした巻毛、太いまゆ毛、暗殺者そして復讐者の見せる渋面、どこを見ても厳かでいかめしい。それから女優たち——あんなに無邪気で厳かな姿をしたものがこの世にいるだろうか。彼女たちは、二、三人連れで、お互いの腰に腕をまわして舞台の上を歩いたり、例の威厳のある男優たちの一人に寄りかかったりしている。彼女たちのびかびか光る飾りの付いた綿モスリンの衣裳と青いサテンの靴にサンダル(長い間はいているのでちょっぴりくたびれている)は、見る人すべての賞讃的である。そして、道化が前に出ようとするのをとどめる彼女たちのおどけた仕種は、実に魅力的だ。

「はじまり、はじまりだよ！前に出て下さい、前に」と田舎者の衣裳を着けた男が七十度目の叫び声をあげる。人びとは押し合いへし合い群をなして階段を上って行く。楽団が突如として演奏を始め、道化とその恋人役がお

手本を示して、あっという間にリール（二人が手をつないで、組になって踊る、スコットランドの軽快な踊り）の輪ができ、古代ローマ風の衣裳を着けた主役が、両手を腰にあててひじを張り、いとも軽快に踊る。そして悲劇の花形女優と無言劇で「めかしや」を演じる紳士とが完璧な踊りを見せる。観衆が、「前に出て」という誘いに応じられなくなると、「さあて、始まり」と興行人が叫び、一座の主役たちは踊りをやめて、大急ぎで最初の出し物である扇情芝居に取り掛かる。

縁日の間、出し物は毎日変わるが、悲劇の内容はいつもまったくといって変わり映えがしない。若い婦人を愛している善玉の遺産相続人がいて、婦人からも愛されている。そしてその婦人をまた愛している悪玉の遺産相続人がいて、こちらは婦人に愛されていない。そして悪玉の相続人は善玉の相続人を捕えて牢にぶち込み、折を見はからって殺そうとする。目的を遂げるために彼は二人の刺客を雇う——良い刺客と悪い刺客である——刺客は二人だけになると勝手にちょっとした殺傷をしでかす。良い方が悪い方を殺し、悪い方が良い方に傷を負わせるのである。それから、善玉の相続人が獄の中で長い鎖を用心深く手に持ち（鎖でつながれたところを、見せようとする演技）、大きな肘掛け椅子に意気消沈して座っている場面になる。そして若い婦人が二小節の静かな音楽に合わせて入って来て、善玉の相続人を抱き締める。それから二小節のテンポの早い音楽（専門用語で「震音曲」と呼ばれるものである）にのって、悪玉の相続人が入って来て、実に恐ろしい態度でどなり散らし、若い婦人を虫けらのように投げとばし、善玉の相続人に向かって、「卑、卑きょう者め——こ、この恥知らずめが！」と大声で喚くのであるが、大声で喚くのは怒りをあらわに見せることと、場内のおがくずで自分の声が弱められるのを防ぐという二重の目的のためである。場面は盛り上がり、悪玉の相続人が刀を抜いて善玉の相続人に突っ掛かる。青い煙が立ち昇り、どらが鳴り、背の高い白い身なりの人物（この時までテーブルクロスをすっぽりかぶって、肘掛け椅子の背後に身を潜ませていた）が、「静けき夜幾たびも」（トマス・ムアの詩になるアイランドの民謡）の歌に合わせてゆっくりと立ち上がる。誰あろう、これこそ悪玉の

相続人の父親によって殺された善玉の父親の亡霊なのである。これを見て悪玉は卒中を起こし、どさりと、と言っても舞台が狭く身体を伸ばして倒れることができないので、字義通り「身体を丸めて」（原語の‘all of a heap’を）倒れる。その時、良い方の刺客がよろけながら登場し、自分は正しい相続人を殺すために悪い刺客と一緒に悪い相続人に雇われた者で、昔は数知れず人を殺してきたが、今ではそれを心から悔いており、もう足を洗いたい、と言う——この約束を口にした途端に彼は息を引き取り、馬鹿な演技にけりをつける。それから善玉の相続人が鎖を投げ捨てる。そして二人の男、船乗り、若い女（善玉の相続人の借屋人である）が登場する。亡霊は皆に向かって無言の身振りをする。誰もが超自然の力を借りてその意図を察知する——観客の方はちっとも分からないからである。そして亡霊（青い火がなければ何もできない）は、煙で窒息しかけている善玉の相続人と若い婦人に祝福を与える。その時マフィン売りの鈴が鳴り、幕が下りる。

この旅巡業の一座に次いで人気のある見せ物は、旅回りの動物園、平たく言えば「野獣ショー」である。ここでは、護衛兵の衣裳に豹皮の帽子をかぶった軍楽隊が休みなく演奏している。そして、人の頭を掻き裂いている虎や、食われている人間から離すために灼熱した鉄棒で焼かれているライオンの生々しい色彩の絵看板が、客寄せのため外に掛けられている。

ここで主役を努めるのは、大てい背がとても高く、しゃがれ声をした人物で、緋色のコートを着て杖を手にし、その杖でわれわれがききほど目にした絵看板を時おりたたいて、自分の説明を実証してみせるのである——まあ、こんな調子である、「さあ、さあ、さあ、ライオンだよ、ライオンだよ（トン）、キャンパスに描いてあるのとまったく同じライオンだ（トン、トン、トン）、待ち時間なし、種も仕掛けもなし。獰猛なライオンだよ（トン、トン）、この前キャンパウエルの縁日で紳士の頭をかみ切った時は一歳だったが、大人になってからは一年に平均三人の飼育係を殺してるんだ。こんな話を聞いてもらったからって、余分に料金をもらおうってんじゃない。入場料はたったの六ペンス。」この口上はきまって大変な評判を呼び、六ペンス銅貨が驚



くほどの速度で金庫に流れ込む。

小人もまた大変な好奇的である。小人、女巨人、生ける骸骨、狂暴なインディアン、「純白の髪とピンク色の目をした絶世の美女」、その他にも二、三の自然の珍奇が全部一緒に一ペニーという安い見物料で見られるので、この見せ物はいつも大変な数の見物客を引きつけている。小人の芸でいちばん面白いのは、彼がいつも持ち歩いている約二フィート六インチの小さな箱の中に、長い訓練によってV字型の靴脱ぎ器のように身体を二重に折り曲げて、ぴたりと入り込んでしまうことである。この箱の外側は、六つの部屋を備えた家のように描かれていて、彼が二階の窓から呼び鈴を引っ張ったり、ピストルを撃ったりするのを見ると、見物人はそれが彼の所有するありふれたロンドンの邸宅で、他の邸宅同様、客間や食堂や寝室に分かれていると本当に信じてしまうのである。箱に閉じ込められたあと、この不幸な小人は外に出されて、自分の主人と滑稽なやり取りをして見物人を笑わせる。そのやり取りの中で、小人（いつもひどく酔っ払っている）は、箱の中で滑稽な歌を歌うと誓い、女性の見物人たちにいろいろとお世辞を言うものだから、彼女たちは「前においで下さい」という誘いに一も二も無く応ずる。女巨人の方は小人ほど簡単に動かせないの（実物がいないことを遠く、同じに言っている。）、途方もない大きさのズボンと巨大な靴が持ち出され、二、三人の大男と一緒にそれをはいて観客を熱狂的に喜ばせる。そして、これらの衣服が女巨人の普段着であるというまじめくさった説明に、観客はすっかり満足するのである。

しかし、縁日の催し物の中でもっとも素晴らしく、人がいちばん足を向ける小屋掛けは、「王冠と錨」——仮設の舞踏室である。長さが何百フィートあったか忘れてしまったが、入場料は一シリングである。入場料を払って中に入るとそのすぐ右手に、軽い食事を取れる場所が設えてあって、そこには冷肉、焼肉、ゆで肉、フランスパン、黒ビール、葡萄酒、舌肉、ハム、それに記憶に間違いがなければ鶏肉までが、食欲をそそるようにきれいに並べられている。高い壇にオーケストラが陣取り、部屋はいなか踊り（輪になったり、二列に向かい合ったりし）ができるぐらいの広さだけ、継ぎはぎの板敷になって踊る一種の対舞。

いる。

この人工の楽園を司る長はいない——何もかもが素朴で、親しみがあり、巧みがない。埃が目くらませ、暑さは耐えられないほどだ。集まった人たちは大いにはしゃぎ、元気いっぱいである。婦人たちは、活気に満ちて無邪気に紳士の帽子をかぶり、紳士たちは婦人のボンネットをかぶったり、付け鼻や山の低いほくち箱のような帽子といった少し金のかかる飾りをつけたりして、「賑やかなお祭りの舞台」を行進する。紳士たちがおもちゃの太鼓をたたき、そのあとをおもちゃのトランペットを吹く婦人たちが続くのである。

こうしたさまざまな楽器、オーケストラ、叫び声、「スクラッチャー」  
（背中をこすると服を引き裂くような音を出す玩具。）それに舞踊の生み出す騒音には度肝を抜かれる。踊りそれ自体が筆舌に尽くし難いものである——一回の旋回にほぼ一時間、その間に婦人たちは得も言われぬ活発さを見せて中央をびょんびょん跳びはねるのである。紳士たちの方は、「四人円舞」が始まるたびに、足を踏みならし、葉巻を口にくわえ絹のハンカチを手にして中央に出たりまたもどったりして、いやどころか喜んでいる相手の婦人をぐるぐる引き回し、無理矢理前進して引っくり返ったり、相手を抱き締めたり、他の組にぶつかったりしたあげく、疲労困憊して動くこともできなくなってしまう。夜が更けるまで、同じ情景が飽くことなく繰り返される（時おり起こる「喧嘩騒ぎ」が多少の変化を添えるだけである）。数多くの店員や丁稚は、翌朝目がさめると、頭がずきずき痛み、ポケットは空っぽ、帽子はぐちゃぐちゃになっている。そして、どうして家にもどれなかったのか大変あやふやな記憶しか残っていないのである。

## 第十三章

### 素人芝居

『リチャード三世』—— グロスター公、2ポンド。 リッチモンド伯、1

ポンド。 バッキンガム公、15シリング。 ケイツビー、12シリング。 ト  
レッセル、10シリング6ペンス。 スタンレー卿、5シリング。 ロンドン  
市長、2シリング6ペンス。

このような貼紙が、私設の芝居小屋の紳士用楽屋とか俳優<sup>グリーン・ルーム</sup>の控室（あるとしたらの話であるが）に、糊で貼付けてある。金額は、芝居に取り付かれた頗馬な連中が店の帳場の抽出から抜き取ったり、事務所の経費を水増ししたりして捻出するもので、彼らはうまく言いくめられてその金額を支払い、自分たちの悲しむべき無知と間抜けぶりを芝居小屋の舞台にさらす権利を買い取るのである。彼らは、自分たちの愚かしさを目立たせてくれる人物であればあるだけ、その役柄に応じて金を支払うのである。たとえば、グロスター公には二ポンド出すだけの値打ちはじゅうぶんにある。というのも、この芝居がグロスター公の独壇場だからである。身に着ける刀はどうしても本物でなければならないし、さらに結構なことに、芝居の間何度かそれを抜く必要がある。独白だけでも優に十五シリングの値打ちはある。それにヘンリ王刺殺がある——これが三シリング六ペンスでは断然安い。これで十八シリング六ペンスになる。ひつぎ担ぎをいじめること——まあ十八ペンスだろうが、それよりもずっと値打ちはある——これで一ポンドの計算になる。それにアン未亡人との恋の場面、そして第四幕の大騒ぎに十シリング加えてもけっして高いとは言えない——それでわずか一ポンド十シリング、「奴の首をはねろ！」という台詞までついている。——この台詞は拍手喝采間違いなしで、しかも演技はきわめて簡単である——「奴の首をはねろ」\*（早口に大きな声を出す——それからゆっくりとせせら笑うように）——「バァァァキングムの命運もこれまで！」\*と「キ」のところに力を入れる。役者は少しずつ隅の方に退いて行き、慎重を期してはいるが必ずやりおおせて見せると言わんばかりに、この台詞を言いながら右手を動かすのである。天幕の場面は、間違いなく半ポンドの値打ちがある。格闘はただでできるし、立派な格

\* この二つの台詞はシェイクスピアの原作にはないもので、コリー・シパー（1671-1757）が改作して挿入したもの。

闘が素晴らしい見せ場になるのは周知のことだからである。一、二、三、四——と上になり、一、二、三、四——今度は下になる。次いで、相手に突っかかり、巧みに身体をかわし、するりと逃げる。そして倒れてひざをつき、その姿勢のまま格闘し、また立ち上がってよろよろと歩く。いくら時間がかかるようでも——まあ十分ぐらいは——これを続けてかまわない。そして地面に倒れ（怪我をしないでうまくできれば後ろ向きに）、勇敢に闘って死ぬ。大向こうをうならせること間違いなしである。こうした決闘は、アストリー座や、サドラーズ・ウェルズ座（トマス・サドラーが1688年に発見した鉱泉の近くに建てられた演芸場として出発したが1765年に煉瓦の建物に建て換えられ、曲馬や大衆演劇が行なわれた。1916）でいつもやっているもので、決闘の仕方ならどんなへぼ役者だって知っている。幼い子供とか白装束姿の女性がやると決闘の興味は大いに増す——実際のところ、正式の本格的なだんぴらを抜いての恐ろしい決闘が子供や女性抜きでできるとは思われない。しかし、「リチャード三世」の幕切れの場面で、こうした舞台効果を狙ってもなかなかうまく行かないだろうし、少々異常であろう。それ故、なすべきことはただ、まずいところは精精繕って、時間をかけてとことんまで闘って見せることである。

芝居小屋の主だったひいき筋は、薄汚ない少年たち、弁護士の事務所で働く下っぱの書記生、市の会計事務所からやって来る頭でかちの若者、商売が貸衣裳屋でそれだけで確実に素人芝居の舞台に上げられるユダヤ人、時おり主人のお金と自分のお金の区別がつかなくなる商店の小僧、そして道楽者の中でもよりすぐりのやくざな連中たちである。芝居小屋の所有者は、おそらく劇場のもと背景画家、うだつのあがらないコーヒー店経営者、失意に沈む三流の俳優、もと密輸業者、破産証明を持たない破産者といった人たちである。芝居小屋のある場所は、キャサリーン・ストリート、ストランド、シティ（ロンドンの旧市部）の場末、グレイズ・イン・レインの界隅、サドラーズ・ウェルズ座の近辺といったところ、またウォーターloo橋のサリー側のみすぼらしいどこかの通りで、錦上花を添えていたりする。

女性の場合、自分の演じる人物に一文も払わなくてすむ。言い添える必要

もないが、彼女たちは大ていきまった社会階層から選ばれる。女性の観客も演技者とはほとんど同じ地位の人たちであり、芝居小屋の経営資金を援助する見返りとして、出資した額に見合う入場券をもらうのである。

ロンドンにあるすべての小さな芝居小屋、特に最底クラスのものは、その周りに役者熱に浮かされたささやかな人間の集団を生む温床となる。それぞれの芝居小屋に専属の客がついている。そしてどの芝居小屋でも、半額割引の入場料を払ってぶらりと平土間に入って来たり、入場料が割引のときには、ふんぞり返って仕切り席の奥に入り込んでいく十五歳から二十一歳までのさまざまな若者たちの姿が見られることだろう。彼らは、ドーセイ伯爵（アルフレッド・ドーセイ、1801-52。流行の先端を行くファッションで賞讃の的になった。ディケンズも彼の完璧な着こなしに魅せられていた。）の肖像にならってコートをうしろにかたげ、シャツの袖を折り返し、幕が下りている間、芝居のことなどへとも思っていないのだということを近くの人たちに見せようと、鼻歌を歌ったり口笛を吹いたりしてみせる。そしてビルだれがしとかネッドながしといったへぼ役者のことをなれなれしく口にしたり、「見えぬ洞窟の知られざる盗賊」という新作が稽古中であると語り合ったり、ミスター・パーマーが「知られざる盗賊」の役をすることになっているとか、チャーリー・スカートンがイギリスの船乗りの味方になり、一度に六人の知られざる盗賊とだんぴらを抜いて決闘（芝居に出る船乗りはいつも、少なくとも六人の相手と太刀打ちできるのである）をすることになっているとか、ミスター・パーマーとチャーリー・スカートンとが、第二幕で足鎖をつけたまま二人でホーンパイプ踊りをやってのけるとか、見えない洞窟の内部が舞台全体にわたるとか、その他にも天下の耳目を驚かすような芝居の裏話を披露するのである。こうした人物がみな素人役者なのであって、リチャード、シャイロック（『ヴェニスの商人』に出るユダヤ人の高利貸し。）、ベヴァリー（エドワード・ムア（1712-57）作の『賭博師』（1753）の主人公。）、オセロウ、——若きドントン（トマス・ホクロフト（1745-1809）の戯曲『破滅への道』（1792）の主人公。）、ロウヴァー（ジョン・オキーフ（1747-1833）作の『放蕩の生活』（1798）の主人公。）、キャプテン・アブソルート（R. B. シェリダン（1751-1816）作『恋敵』（1775）の登場人物。）、チャールズ・サーフィス（R. B. シェリダン作『悪口

学校』(1777) ) といった役を芝居小屋でこなすのである。  
の登場人物。

近くの居酒屋や劇場のコーヒー店にたむろする彼らの姿を御覧になってほしい。彼らはそこでは王様であり、本物の王などどこにも存在しないといわんばかりの様子である。帽子を片方にかしげ、腕を腰に当てて肘を張り、一週十八シリングの週給と慈善興業（出演者がそれぞれ売りさばいた切符の）の取り高が実際に懐に入ったかのように身体をゆすって歩く。彼らのうちの一人がもしアストリー座の雇い役者と知り合いであるなら、それだけで彼は好運な人物である。装飾用のネッカチーフを着け、焼きコルクで描いた眉毛が部分的に残り、ほお紅が顔についたままで、たった今舞台あるいは芝居仲間のところからやって来たばかりだということを証拠だてている、誰だかさえない風采の男とその人物が親しそうに会話を交わしているのを仲間の者たちが見るとき、その羨望と賞讃の入り混じった様子は、こうした公の人物がいかに高い賞讃の的になっているかを示して余りあるものである。

友人や雇主に知られるのを防ぐためと、高尚に聞こえる名前を役者につけることで演じる人物の興味を高めるという二重の目的から、こうした名優たちは偽名を用いる。それは、芝居小屋に貼られるビラの中でも少なからず興味をそそるものである。ペルヴィル、メルヴィル、トレヴィル、パークリー、ランドルフ、バイロン、シンクレアなどは、もっともつつましい部類である。そしてジェンキンズ、ウォーカー、トムソン、バーカー、ソロモンズなどといったぱっとしない名前はまったく省みられない。芸名をつけると、どこか堂々とした感じが出るし、おまけに素人役者のみすぼらしさを立派に弁護してくれる。縮んで色の褪せたコート、おんぼろの帽子、継ぎはぎのしみだらけのズボン——いや、ひどく汚れたシャツまでもが（こうした身なりは、「劇団」の俳優たちの中でもそれほど珍しいものではない）着用されるが、それは変装のためで、万が一にも正体がばれてしまうと困るからである。それにこうした服装をしていれば、仕事や職業について面倒な質問をされたり、またそれについて説明したりしなくて済む。さしあたっては皆が無職であり、天才でも時おり身を屈して頭を下げなければならないような不愉快

かつ不必要な名士などここにはいないのである。女優たちとはいうと（神の恵みのあらんことを）、形にとらわれた愚かな振る舞いなどけっしてしない。楽屋に入れるというだけで、じゅうぶん彼女たちと近づきになれる——というのは、演技によって親密な間柄になれるのは、もちろん厳密な意味で立派な役者だけであることを、彼女たちは知っているからである。彼女たちが、芝居小屋の座がしらに全幅の信頼を寄せていることは確かで、座がしらの方は、役者をよく知っているなら——言い換えれば、彼がその役者の演技によってひとたび金を懐に入れ、またいつかうまい汁が吸えると確信すれば、いたって愛想がよいのである。

八時十五分前——今夜は満員になることだろう——すでに六組の客が仕切り席に入っている。平土間には四人の少年と女が一人来ている。オーケストラ席には二人のヴァイオリン奏者とフルート奏者が一人いて、七時（興行の開始時間）から前奏曲を五度やり終えて、六度目の演奏を始めたばかりである。芝居のピラには、少なくとも六時間はかかる興行と宣伝してあるのだから、始まればたっぷり演奏を聞かされることであろう。

白い帽子に市松模様のシャツ、茶色のコートに真鍮のボタンをつけて、黒子の隠れる席の反対側にある舞台わきの特別席の後ろ側をぶらぶら歩いている紳士は、ホレイション・セント・ジュリアン、別名ジュム・ラーキンズである。彼のおはこは風流喜劇で、父のおはこは石炭とジャがいもである（原語の‘line’に含まれる「専門」と「商売」の二つの意味をもじったもの）。彼は最後の芝居でアルフレッド・ハイフライア（不詳）を演ずるのであるが、立派にやりこなすことだろう——支払った金額相当に。彼が今会積した、反対側の仕切り席にいる紳士たちは、今夜マクベスを演じるベヴェリー氏（またの名はロギンズ）の友人かつ後援者たちである。この紳士たちのそれぞれが、仕切り席の前についているクッションに足を上げ、いかにもくつろいだ風に紳士ぶっている姿が目にとまる。貧しい家の子供たちが空屋の扉を二重ノックしても、人道的見地から黙って見逃してもらえるが、それと同じ理由で、劇場でのこうした振る舞いは黙認されている——他の場所ではやろうにもできないからである。オペラグラスを

これ見よがしに前に置いて、中央の仕切り席に座っている恰幅のいい二人の男は、座元の友人たちである——二人は田舎の富裕な興行主であると、この座元は幕の後ろで一座のひとりひとりにこっそりと教える——田舎の富裕な興行主で、新しい座員を探しているんだ、と。いつも座元のためを思っていて、今も衣裳を持って馳せ参じた衣裳方のネイサン氏は、必要ならば宣誓してでもその話を確証してみせると申し出る——しかし、補強証拠はまったく不必要である。頓馬な連中のこと、話をすぐ信じてしまうからだ。

今よく太ったユダヤ人の女が入って来たところだが、彼女はそのそばに座る、青いガラス玉のネックレスを着けた青白い顔の痩せた少女の母親である。この少女は「芸人」に仕立てられつつある。無言劇が彼女の持芸になる予定で、今夜は悲劇のあとのホーンパイプ踊りで初舞台を踏むことになっている。セント・ジュリアン氏のそばにいる背の底い痩せた男は、この芝居小屋専属の道化芝居役者兼ざれ歌の歌手である。彼の白い顔には天然痘の深い痘痕があり、薄汚れたすかし模様のシャツの胸は、てんとう虫のようなさんご色のボタンが飾られている。他の観客——今見るとかなりの数になっている——は、ぼんくらで下等な連中の寄り合いである。

フットライトが姿を現す。ただ並べられただけの箱の周辺に置かれた六個の小さなオイルランプが、燈心を上げて明るくされる。こうして明るさが増すと、ごみの存在と観客席で特に目立つ塗料の欠如（ペンキがはげていること）が、よりはっきりと見えてくる。それはさておき、こうした準備が芝居の幕開きの近いことを告げているので、幕開きのベルが鳴る前に「裏」を覗いてみよう。

舞台の下にある狭くて小さな通路は、特別きれいでもないし、とりわけ明るくもない。床張りがまったくされていない上に、しめっぽいかびの臭いがあたりに充満して、心地よいとはとても言えない場所である。気をつけないと、そこに置いてある食器かごにつまずいてころんでしまう——これは「小道具」の一つ——魔女の洞窟の大釜に使うのである。物干し綱を張るときに使う折れた支柱を手を持ち、一ポイントびんから水割りジンを飲んでいる不様な人物たちは、魔女の姉妹である。壁のぐりに長い間隔を置いて取り付



けられている燭台のろうそくが照らすこのみじめな部屋は、男優たち共有の楽屋で、天井にある四角い穴は、その上の舞台に通じるはね上げ戸である。舞台を支える梁が天井の装飾となり、蜘蛛の巣が風流にかかっている。

悲劇に登場する人物たちは、みな舞台衣装を着けており、それまで着ていた服は、部屋のぐらりに置いてある木製の化粧台の上に、あわただしく脱ぎ捨てられた感じで乱雑に散らかっている。鏡の前に立っているたばこ屋風情の人物はバンクォウである。そして脚を惜しみなく見せて、化粧刷毛で彼の顔に優しくべにをつけてやっている若い婦人は、フリーアンス（バンクォウの息子）の扮装をしている。カンバランド（リチャード・カンバウンド、1732-1811。）版の『マクベス』のト書きを調べている大柄な女性は、今夜のマクベス夫人である。彼女はいつもこの役に選ばれるのであるが、それは彼女が背が高く大柄で、シドنز夫人（セアラ・シドنز夫人、1775-1831。当時は悲劇の女王としても）に少しばかり似ている——かなり離れて見ればであるが——からである。髪の毛の薄い、わに足の間抜けな感じのひよっこ——都会育ちの人種であることは保証してもいい——は、新入りのほやほやである。彼は、今夜マルカムを演じるのだが、観客に慣れるだけで精いっぱいといったところだ。彼は少しずつうまくなっていき、一カ月経てばオセロウを演じることだろう。そしてさらに一カ月経てば、使い込みをして手が後ろに回ることだろう。彼が熱心に会話を交わしている黒い目の女は、「淑女」の扮装をしている。彼女にしても、淑女役では初の舞台になる。石鹸をなすりつけて眉毛を白くしている十四歳の少年は、スコットランド王ダンカンである。古びた緑色のチューニックを着て汚れた茶色のブーツをはき、顔を焼きコルクで黒く塗った薄汚ない二人の男は、「兵士」である。

「急いで下さい、みなさん」と、赤い髪の毛と赤い頬ひげをしたユダヤ人の衣裳方が、はねあげ戸のところから叫ぶ、「開演のベルが鳴りますよ。フルート奏者が、これ以上吹かされたら息が切れると言ってます。前の客がひどくやかましくなってきました。」舞台に通じる小さくて急な六段の階段に、誰もがいっせいにどっと押し寄せる。はらはらと不安げに、それぞれが困惑

の色を顔に浮かべながら、この雑多な一団はほどなくわき道具の置いてある場所に集まる。

「さあ」と、舞台の黒子側の正面のそでの背後にかかっている手書きの早見表を見て、座がしらが叫ぶ、「第一幕、広々とした荒野——ランプを下ろす——雷鳴と稲妻——準備できたか、ホワイト？」〔この呼びかけは、兵士の一人にされたもの。〕「準備よし」——「よろしい。第二場、正面の部屋だ。正面の部屋は下ろしたか？」——「下ろしました。」「よろしい。」——「ジョーンズ」〔舞台天井（大道具を操作する場所）に上がっているもう一人の兵士に向けて言われる。〕「おーい！」——「ベルを鳴らしたら荒野を巻き上げてくれ。」——「承知した。」——「第三場、通れる橋のある遠景。橋の用意は、ホワイト？ 脚立<sup>もも</sup>はあるか？」——「だいじょうぶです。」

「結構。舞台から出る」と座がしらは叫び、舞台のそでと壁の間の、そしてそでとそでの間の、わずかなすきまに一座の者全員を詰め込む。「位置だ、位置を取って。おい、魔女たち——ダンカン——マルカム——血を流す士官——血を流す士官はどこだ？」——「ここにいますよ！」と士官に扮するためにずっとばら色顔料を塗っていた士官役の男が答える。「じゃ用意だ。ホワイト、二回目の演奏開始のベルを鳴らしてくれ。」舞台に出る役者たちは急いで位置を取り、舞台に出ない役者たちは、観客席を何とか見ようとして、ちょうど観客の目に入る場所に身を置いてしまう。ベルが鳴る。そしてオーケストラが観客の要求に応えて、三回ほどはっきりとした和音を鳴らす。開幕のベル——悲劇（！）の幕が上がる——素描は幕となる。

## 第十四章

### 屋のヴォクスホール公園\*

\* 1660年に開園されたニュー・スプリング・ガーデンが母体で、1728年ジョナサン・タイアーズが所有者になったとき、ヴォクスホール公園と呼ばれるようになった。あか／＼

昼間のヴォクスホール公園はどんな風に見えるだろうと言い出しでもしようものなら、そんな馬鹿げたことをどうして考えたりするのかと、大声で嘲られた時代があった。昼間のヴォクスホール！ ビールの入っていないジョッキ、議長のいない国会、ガスの入っていないガスランプ——ばかばかしくて話にならない、考えるのも滑稽だ。当時、ヴォクスホール公園は、こっそりと秘密の実験が行なわれる場所だという噂もされていた。中ぐらいの大きさのハムを、地面いっばいに敷きつめられるほど薄く切り分ける肉切りナイフの神秘の妙技が実施されているとか、高い木の木陰でニーガス酒の鉢に入る水の許容量を発見するために、研究者たちが不眠不休で化学実験に取り組んでいるとか、何箇所かの鳥学の研究にあてられた人気のない場所で、他の学識豊かな賢人たちが誰にも分からない方法で、家禽を骨と皮の単なる結合状態にもどす研究に倦むことなく動しんでいるといった噂である。

こうした類いの漠然とした噂、さらに他にも同じような流言が飛び交い、ヴォクスホール公園の神秘の趣はいっそう深められたのである。そして、神秘は多くの要素を孕んでいるわけで、ともかくかなり多くの人たちにとって、この神秘ゆえに公園の与える楽しみは少なからず増していたのである。

実を言うと、われわれはこうした人たちと同じ経験をしたことがあるのだ。われわれは、照明で明るくされた公園の木立を楽しく歩き回った。ぶらぶらと歩きながら、昼間ずっと続けられていた辛抱強い骨の折れる研究のことを考えたり、夜分ランプの明りの下で、音楽を聞きながら取る夕食の際に、その研究の成果をまのあたり見たりするのだった。神殿や演芸場やコズメラマ（世界各地の実景の）のぞきめがね。があり、噴水が目の前できらきら輝いていた。女性歌手の美しさや紳士の優雅な物腰にわれわれは見惚れ、数知れぬランプに目がくらみ、パンチ酒で頭がくらくらして幸せに酔うのだった。

不幸なことに、ヴォクスホール公園の所有者たちが、昼間の開園に踏み切ってしまった。残念な話だった。そうなれば、長年月にわたってこの土地を

---

＼あかと照明された公園の魅力は、もちろん日没になってからで、1836年まで昼間は人を入れなかった。1859年に閉園される。

包んできた、そして昼間の太陽と今は亡きシンプソン氏（C. H. シンプソン。儀式や催し物の司会者として人気を博した。）以外侵したことの無い神秘のヴェールを、冷酷無残にも引き裂いてしまうことになるからである。昼間に出かけるのはためらわれた。今考えると、どうしてためらったのかよく分からない。おそらく、失望を味わうことになりはしまいかという病的な意識——運命があるいは決せられるのではないかという予感——もしくは天候が悪かったためだろう。理由はどうであれ、われわれはなかなか行く気になれなかったが、二基の気球の競争が行なわれるという知らせが二度三度と出されるに及んで、やっと出かける気になった。

門のところで入園料を支払った。その時初めて、入口に少しでも魔法がかかっていたとしても、今は完全にその魔法が解けているのを目にしたのだった。実際それは、無造作にペンキを塗った板とおがくずを取り合わせただけの、何の変哲もないものだった。急いで通り過ぎるとき、音楽会場と晚餐室とがちらりと目に入った——ただそれと認めただけで何らの感慨もなかった。われわれは、花火場に歩を向けた、少なくともそこで失望を味わうことはあるまいと思ったのである。花火場に着いた。そしてわれわれは、落胆と驚きでその場に釘づけになってしまった。あのムーア式の塔——それが、中央に扉のある木造小屋で、周囲を真紅と黄色で塗りたくった巨大な懐中時計の入れ物のような薄汚ない建物であろうとは！ あの場所——来る夜も来る夜も、炎と大砲の鳴り響く音とともに、恐れを知らぬブラックモア氏（綱渡りの名人。）がすごい綱渡りをやって見せてくれたり、花火の製造に雄々しく打ち込んでいる何がし夫人（今では彼女の名前すら忘れてしまった）が、赤や青やその他の多彩な色を呼び出して自らの殿堂をあかあかと照らし出すとき、彼女の白い衣裳が風にはためくのがしばしば見られたあの場所が！ また、あの——しかしこの時ベルが鳴った。人々はそのベルの聞こえた場所へと算を乱して駆け出して行った。いつもの習性で、われわれもまた先頭の人たちにまじって、必死に駆け出していた。

それは音楽会場で演奏会が始まる合図だった。三角帽をかぶった陰気な少

数の一団が、「タンクレディ」(G. ロッシーニ)  
(作曲のオペラ。)の序曲を「演奏」していた。

そして、子連れの小柄な紳士淑女の大勢の群れが、園亭  
(公園のいたるところに設けられた休憩や食事のための入り込)みで飲みかけていた黒ビールを放って急いで飛び出し、音楽会場に群がった。燕尾服を着たとりわけ小さな紳士が、青い絹の外套と大きな白い羽根飾りのついた絹のボンネット姿のとりわけ背の高い婦人を連れ出して、すぐにも悲しい二重唱を始めると、感嘆の低いささやき声が騒然と湧き起こった。

この小柄な紳士のことは、われわれもよく知っていた。多くの楽譜に石版刷りの彼の似顔が載っているのを見ていたからである。歌ってでもいるかのように口をあけ、手にワイングラスを持ち、背景には二本のぶどう酒びんと四個のパイナップルとが載ったテーブルが描かれているものである。背の高い婦人もまた、われわれが何度もうっとりと見惚れた歌手であった——ほんとうに昼間は、そしてパンチ酒がないと、人は何と違って見えるのだろうか！それは美しい二重唱であった。最初、小柄な紳士が一つ質問すると、背の高い婦人がそれに答える。それから小柄の紳士と背の高い婦人が一緒に、実に美しい調子で歌う。次いで小柄な紳士が一人で熱情的な歌を歌い、感情が高じて声までも高音になる。それに応じて婦人も同じ調子で歌う。さらに小柄な紳士が一、二度声を震わすと、婦人もそれにならい、二人ともいつの間にかもとの曲にもどるのである。そして小柄の紳士は婦人の手を取って舞台から離れ、熱狂的な拍手喝采が送られる。

しかし特に人気があったのは、コミック・シンガーであった。われわれのそばに、夕食をハンカチに包んで立っていた紳士などは、喜びきわまってほんとうに卒倒しかねない有様だった。このコミック・シンガーは素晴らしくひょうきんな男である。特に目立つのは、亜麻色に近いかつらと年寄りじみた顔つきで、記憶に間違いなければ、イギリスのどこかの州の名が彼の名前(有名なざれ歌の歌手ポール・ベッドフォードのこと。)である。彼は人生の七期(シェイクスピア、『お気にある言葉。』)についての実に素晴らしい歌を歌い、前半の三十分は集まった人たち

をすっかり魅了した。残りの三十分については何も言えない。それ以上聞かずにその場を離れたからである。

われわれは歩き回ってみたが、どこに行っても失望するだけだった。われわれが気に入っていた風景は、飾りを施しただけの見世掛けに過ぎなかった。ランプの明りを受けて、実に華やかにきらめいていた噴水は、破れた送水管さながらといった外観を呈していた。装飾はどれも薄汚れていて、遊歩道はどこも陰気臭かった。小さな野外劇場で綱渡りが試みられたが、それはいかにも奇異な感じであった。太陽が演技者のぴかぴか光る衣裳を照らし、その施回動作は一族の地下納骨室で踊る田舎ダンスと同じように活気があり、その場にふさわしいものだった。そんなわけでわれわれは花火場に歩をもどし、グリーン氏（チャールズ・グリーン、1785-1870。気球の製造と操縦で有名な人物で、最初のガス気球飛行を果たし、ヴォクスホール公園から527回の飛行を記録し、1838年には27,146フィートまで上昇した。）をじっと見ているちょっとした人だかりの中に入っていった。

六人ばかりの男たちが、ガスがいっぱいに満たされすでに吊籠も取り付けられた気球が激しく浮き上がろうとするのを押さえつけていた。一人の上院議員が気球に乗るといふ噂が広まっていたので、群衆はいつになく気遣わしげで口数も多かった。薄汚れた顔をして、色褪せた黒い服をまとい、首には赤い縁のある色褪せた黒のネッカチーフを細く束ねて巻きつけた小柄の男がいたが、この男は誰の話にも口を突っ込み、耳に届く範囲で言われるどんな意見にも何やかやと口を出していた。彼は腕組みをして気球を見上げていた。そして時おり、周囲を見回して誰かの目をとらえると、気球飛行者に対する自らの敬意を次のように披瀝するのである、「あれは大変な人物ですぞ、グリーンてえのは、考えてもごらんなさい、今度の飛行で二百回以上てえんですから。いやはや、グリーンのような有能な人間は齒痛ってえものを経験したことがねえですよ。これから百年経ったってそうでしょう。まあそんなもんです。天賦の才能ちゅうか本物の才能にめぐり会うことがあれば、それを助長してやるんですな。それがあっしの言い分ですあ。」こうした趣旨のことを言い終えると、彼は前にもまして決然とした態度で腕を組み、己れと

グリーン以外の人間なら誰であろうと挑んでやるといったほれぼれとする態度で気球を眺めるのであったが、その姿を見て集まった人たちは、深い感銘を受け、これは哲人だと決め込むのであった。

「ああ、おっしゃる通りです」と別の紳士が言う。妻、子供たち、母親、妻の妹そして大ぜいの女友達がこの紳士の同伴者で、彼女たちは、白いハンカチ、飾りべり、短い外套<sup>スベンスカー</sup>といった優雅な身なりをしている。「グリーン氏は堅実な人です。あの人のことで心配はいりませんよ。」

「心配ですって！」と小男が言う、「素晴らしい見物じゃねえですか、グリーン夫婦が気球に乗って空に昇り、別の気球で息子夫婦が親たちの気球とくっつきあって舞い上がるのをこの目で見れるんです。みなで三時間そこらかけて二、三十マイル飛び、そして駅伝馬車でもどって来るんですぜ。科学はここまで進歩するか分かったもんじゃないねえです。頭を悩ましてさあ。」

ここで、短い外套を着た女たちの間で賑やかなおしゃべりが始まった。

「御婦人方は何を笑ってるんです？」と小男が謙遜な態度で尋ねた。

「妹のメアリなのよ、言ったのは」と娘たちの一人が言った、「閣下が吊籠にお乗りになったらこわくなって、下りたいとおっしゃらなければいいけどって。」

「それだったら、心配ご無用です」と小男が答えた、「もし勝手に一インチでも動こうものなら、グリーンが望遠鏡で頭を殴って、ただちに吊り籠の底に沈め、再び下りるまで気絶させておきますよ。」

「ほんとうですか？」と相手の紳士。

「ああ、やりますとも」と小男が答える、「たとえ相手が王様だってちょっとも気にするもんですか。グリーンの沈着振りは、驚嘆ものでさあ。」

ちょうどこの時、出発の用意がされている気球の方に、人びとの目がいっせいに向けられた。二つ目の気球に吊籠が取り付けられ、二基の気球が触れ合うほど間近に運ばれ、軍楽隊が熱烈に演奏を始めた。それは、どんな意気地なしでも、今置かれている地上の場所を、いかなる乗り物でもかまわないうから進んで離れたたいという気分にさせてしまうほどの熱気であった。それ

から父親のグリーンと高貴な同乗者とが一方の吊り籠に乗り込み、もう一方に息子のグリーンとその同乗者が乗り込む。気球が浮き上がり、空の旅人は立ち上がり、取り巻く群衆は歓喜の叫び声を上げる。初めての気球飛行を経験する二人の紳士は、びくついてなんぞいないとばかり旗を振ろうとするが、ずっと吊り籠にへばりついたままである。気球はふわりふわりと離れて行く。例の小男は、二基の気球が大空の中でただの点になってしまっていてずっと経ってから、まだグリーン氏の白い帽子を見分けられるとまじめくさって言い張る。公園は詰め込んだいっばいの群衆を吐き出す。少年たちは、「気球だあ」と叫びながら走り回る。人の込み合うどの往来でも、そこかしこの店から人びとが道のまん中に飛び出して来て、ほとんど首の骨が外れるまで大空の小さな黒い二つの物体を眺める。そしてすっかり満足すると、再びゆっくりと店にもどって行く。

翌日の朝刊に気球旅行の素晴らしい記事が載り、グリーン氏の記憶ではその日が彼の経験した飛行の中で五番目に晴朗な日であったこと、地球がずっと見えていたが雲に隠れてその姿を見失ったこと、波動する雲霧に映った気球の影が目さめるように美しかったことなどを大衆は知らされ、さらに太陽光線の屈折についてのちょっとした科学談議や、大気熱とか気流の渦巻といったいくつかの不可解な記事を読まされるのである。

また、ボートに乗った男が「こりゃ驚いた!」と叫ぶのを、グリーン二世がはっきりと聞いたという興味深い記事もあった。グリーン二世はそれを、男の声が気球まで上がり、気球に当たって吊籠にはね返ってきたのであると考えた。そして、翌週上がる気球のことにそれとなく触れて、その話にけりがつけられていた。読者諸氏も新聞を御覧になればお分かりのように、何もかもが実に啓発的で興味深いものであった。日付を言うのを忘れてしまったが、来年の夏まで待って、最初の気球の記事を読んでいただくとよい。それでも、じゅうぶん補いがつくだらう。